

(その2)

履 歴 書	
氏 名 サメシマ ヒロシ 鮫島 浩	生年月日 1957年 3月
本 籍 地 又は国 籍	
現 住 所	
学 歴	
年 月 1975年3月 1981年3月	鹿児島県立鶴丸高等学校卒業 鹿児島大学医学部卒業
職 歴	
年 月 1981年6月 1983年7月 1986年7月 1995年4月 1996年7月 2007年4月 2011年1月 2013年10月 2016年4月 2021年10月	鹿児島市立病院産婦人科臨床研修医 米国、Loma Linda 大学、産婦人科周産期医学 Postdoctoral fellow (3年間) 鹿児島市立病院医師、医長 宮崎医科大学産科婦人科学講座講師 宮崎医科大学周産期母子医療センター助教授 宮崎大学医学部産婦人科診療科長 宮崎大学医学部生殖発達医学講座産婦人科分野教授、総合周産期母子医療センター長 大学病院副院長併任 (医療安全、地域医療担当、女性医師担当歴任) 宮崎大学理事 医学部附属病院 病院長 国立大学法人宮崎大学長 現在に至る
資 格	
年 月 1981年5月 1987年10月 1991年11月 1995年6月	医師免許取得 (第 259646) 産婦人科学会専門医、2015年以降 産婦人科学会指導医 医学博士 母体保護法指定医 (宮崎県医師会)
賞 罰	
年 月 1983年7月	1983-4年国際ロータリー財団奨学生 (米国Loma Linda大学に留学)
業 績 概 要	
(教育に関すること)	
1. 1995年以降、医学部講師、准教授、教授として医学部学生、研修医、専門医、大学院生などの教育に携わった。	
2. 2016年からは大学病院長として、県医師会、県行政との協同によるAll Miyazaki体制を強固にして、研修医、専攻医教育を推進した。また、2021年からは宮崎大学長として、大学教育の全般に携わった。	

3. 1983 年以降、米国ロマリング大学、カリフォルニア大学と連携し、若手人材の国際化、頭脳循環を推進した。

(研究に関すること)

1. 著書・論文 (主な著書・論文を年月順に列記)

1 主な著書 (分担した教科書を除き、編者として監修した以下の著書 3 点)

1) H Sameshima (ed.) Cardiotocograms of cerebral palsy cases. Interpretations and considerations of FHR patterns. The Japan Obstetric Compensation System for Cerebral Palsy. 2014 Sep.

2) H Sameshima (ed.) Preterm labor and delivery. Comprehensive Gynecology and Obstetrics. Springer 2020. ISSN 2364-1932.

3) 鮫島浩, 大月恵理子監訳 見える生命誕生 南江堂 2022, ISBN978-4-524-23437-0

2 主な最近の論文 (約130の英文論文から最近の指導論文を中心に)

1) Haraguchi N, et al. Effects of sturgeon fillet intake on top-ranked Japanese female long-distance runners. J Obstet Gynaecol Res. 2023 ;49(8):2164-74.

2) Yamaguchi-Goto T, et al. Fetal heart rate patterns complicated by chorioamnionitis and subsequent cerebral palsy in Japan. J Obstet Gynaecol Res. 2023 ;49(2):625-34.

3) Saito S, et al. A randomized phase 3 trial evaluating antithrombin gamma treatment in Japanese patients with early-onset severe preeclampsia (KOUNO-TORI study): Study protocol. Contemp Clin Trials. 2021; 107: 106490. doi: 10.1016/j.cct.2021.106490.

4) Muraoka J, et al. Intrapartum fetal heart rate patterns and perinatal outcome in chorioamnionitis at or beyond 34 weeks of gestation. J Obstet Gynaecol Res. 2021;47: 1110-7.

5) Maki Y, et al. Clinical chorioamnionitis criteria are not sufficient for predicting intra-amniotic infection. J Matern Fetal Neonatal Med. 2020; 8:1-6.

6) Sumiyoshi K, et al. Delayed rhythm formation of normal-structured, growth-restricted fetuses using fetal heart rate monitoring patterns. J Obstet Gynaecol Res. 2020; 46(8):1342-8.

7) Kino E, et al. Impact of tocolysis-intent magnesium sulfate and beta-adrenergic agonists on perinatal brain damage in infants born between 28-36 weeks' gestation. J Obstet Gynaecol Res. 2020;46(10):2027-35.

8) Kawagoe Y, Sameshima H. Hypoxia: animal experiments and clinical implications. J Obstet Gynaecol Res. 2017;43(9):1381-90.

9) Fujisaki M, et al. Antithrombin improves the maternal and neonatal outcomes but not the angiogenic factors in extremely growth-restricted fetuses at <28 weeks of gestation. J Perinat Med. 2017;45(7):837-42.

10) Ohhashi M, et al. Magnesium sulphate and perinatal mortality and morbidity in very-low-birthweight

infants born between 24 and 32 weeks of gestation in Japan. Eur J Obstet Gynecol Reprod Biol. 2016;201:140-5.

- 11) Kodama Y, et al. Temporal trends in perinatal mortality and cerebral palsy : A regional population-based study in southern Japan. Brain Dev. 2016;38(4):386-91.
- 12) Kaneko M, et al. Perinatal morbidity and mortality for extremely low-birthweight infants: A population-based study of regionalized maternal and neonatal transport. J Obstet Gynaecol Res. 2015;41:1056-66.
- 13) Furuta K, et al. Acute and massive bleeding from placenta previa and infants' brain damage. Early Hum Dev. 2014;90(9):455-8.

2. その他（受賞等特記すべき事項を年月順に列記）

1998年から宮崎県全域のPopulation-based研究を開始し、周産期医療の問題を解決する宮崎方式を確立した(宮崎日日新聞科学賞、代表池ノ上克教授)。2020年には分娩監視装置共同監視の有用性(AMED研究)を示し、日本トップの周産期医療体制へ発展させるとともに、webを用いた遠隔医療の周産期医療への嚆矢となった。

1986年から低酸素症と胎児行動(脳波、呼吸様運動、眼球運動)の基礎研究を開始し、世界的な評価を得た。1995年からマグネシウムの胎児脳保護作用と母体投与による胎児脳pre-conditioning効果を明らかにし、臨床応用、ガイドライン記載に繋げた。

（学会及び社会的活動に関すること）

1. 学会活動（学会・協会等における活動状況を年月順に列記）

国内では、多くの産婦人科関連学会の理事、評議員として長年に渡り活動し、1998年からは米国の産婦人科学会ACOG会員、SGI会員として活動した。全国規模の学会長として日本母体胎児医学会(2013年)、日本糖尿病・妊娠学会(2017年)、日本産婦人科新生児血液学会(2018年)、日本産婦人科感染症学会(2019年)、日本周産期新生児医学会(2021年)などを務めた。2022年から日本産科婦人科学会名誉会員である。

2. 社会的活動（国・地方公共団体の委員会及び各種団体における活動状況を年月順に列記）

日本医療機能評価機構、日本産科医療補償制度の審査委員を設立当初(2009年)から務める。
日本学術振興会科学研究費助成事業の評価委員を長年務める。
2023年から文部科学省高等教育局 大学設置・大学法人審議会委員を務める。

（経営・管理運営に関すること）

2016年以降の病院長時代には、宮崎県医療審議会、新型コロナウイルス感染症対策協議会などの活動を通じて県行政との連携や、県医師会の活動に貢献した。また、宮崎大学理事・財務委員会委員長として大学の経営、運営に貢献した。

2021年以降、学長としての約2年2ヶ月間は大学運営管理責任者としての任務を誠実にこなしてきた。その結果、中期計画の実施状況ではそれなりの成果をあげることができた。また宮崎大学基金や産学共創会議基金の自己財源を充実させ、財務運営の基盤を強固にした。

（その他）

特にありません。

上記のとおり相違ありません。
また、学長候補者となった場合は、学長に就任することを誓約します。

2023年 12月 8日

氏名 鮫島 浩



- (注) 1. 用紙は、日本産業規格A4縦型とし、履歴を4枚以内で作成してください。
2. この履歴書の内容は、選考過程において公表されます。